

プロローグ

「ついに！ ついにここまで来た！ ようやくエンディングが見られる！」

コントローラーを握る手に力がこもる。わたしの推しはヒロインの幼馴染の近衛兵だ。このゲームには他にも王子や騎士団長様や賢者様といった魅力的なキャラクターが攻略対象として選べるようになっていた。わたしは幼馴染モノが好きなので近衛兵の彼が推しなのだ。

（前期の試験勉強はこれ見たら絶対やるから！）

試験前であろうとエンディングの誘惑には勝てなかった。

（まずは腹ごしらえ！ 冷蔵庫に大福があったはず）

車椅子の方向を変えて、キッチンへ向かう。

「やっぱり、家が一番動きやすいわ」

生まれたときから足が不自由で歩けなかった。わたしが生まれてすぐにその事実を知った両親は車椅子が動きやすいようマイホームを購入した。両親はとても大事に育ててくれたし、仲の良い友達にも恵まれた。ただ、やっぱり歩けない自分に自信がなくて、恋をしたことはなかった。

現実の恋愛はしたことがなかったけど、やっぱり懂れていて。恋愛シ

ミュレーションゲームをプレイするのが趣味だった。いろんなイケメンと恋愛した気分になれるのは楽しい。

「ふふふ、いちご大福大好き」

大きな口を開けて一口でぱくつと頬張った瞬間――！

（く、苦しい……！ 一気に詰め込み過ぎた……死因いちご大福なんて
恥ずかしすぎる……）

視界が暗転する。そのままわたしは意識を失ってしまった。

(風が……心地いい……)

頬を撫でる風を感じる。

「ん……。ここどこ？」

頬に芝生のような、生きた草の感触がする。

「野外じゃん！ 運ばれたとしてなぜ外に？」

とりあえず起き上がろうとした瞬間、低い羽音がし視界が緑色の何かで遮られる。

「ぎゃー！ 虫！」

虫は本当に苦手だ。歩けないわたしは、虫を素早くよけるのが難しい。もしかしたら、運動音痴なだけで他の車椅子ユーザーは簡単に避け

一度も立ったことがないはずなのに。

「何これ？ 夢？ 助けてくれたお医者様が超名医でついでに足も治してくれたの？」

そんなはずはないのは実は自分がよくわかっている。現代の医学で治る見込みはない。幼いころから何度も聞いてきたのだ。

「夢でもいい、せっかくなら歩いてみよう」

右足を一步踏み出す。動かし方を知らないはずなのに、自然に動かした。次は左足、こっちもたやすく一步を刻む。

二歩三歩と歩けたら、あとは数えることも忘れ夢中で足を進める。気づいたら走り出していた。

「わたし、走ってる。走ってる~~~~!!!!」

息が続く限り走った。足の問題ではなくて体力が続かず走れなくなつたところで草原に寝転んだ。

「すごい、走るってすごい。楽しい！　わたし走ってみたかった！」

足が治っているという大事件に気を取られていたが、他の異変によろやく気づく。

「あれ、髪！　何この色！　しかも伸びてる……？」

青みがかつた銀髪の腰に届くほどの美しいロングヘア。

歩けるようになること以上に驚く変化など存在しない。普通なら衝撃のはずの髪型の変化が些末なことに感じてしまう。

「これは夢？ 走れるなら夢でもいい！」

変化は髪だけではなかった。さっきまで、ルームウェアを着ていたはずなのに。今は豪華なドレスを着ているのだ。健康な足は長い裾が気にならないくらい軽やかに走ってくれた。

「なんだか別人になったみたい」

深く考えるよりもっと走りたい。邪魔な裾をたくし上げて走りだす。

「綺麗な景色……なんて気持ちいいの。わたし走るのが好き」

前方には丘があり、様々な草花が生えている。

「ぎゃっ」

衝撃に思わず声が出る。景色に見惚れ、よそ見をして走っていたら何

かにぶつかってしまった。

「君、こんなところで何をしている？」

ぶつかった相手はわたしを抱きとめて言った。

「あなたは――」

第一章 攻略対象外の宰相様

「公爵家の令嬢じゃないか、なぜこんなところで供もつけずにいるんだ？」

長身の男性に声を掛けられた。顔をうずめているのになぜ長身なのかわかるのかというと、立っていても頭が胸にしか届かないからだ。車椅子だと体験できないことだ。

「す、すみません」

慌てて顔を離して見上げる。

深いネイビーの髪。緑の瞳は思慮深く知性を感じさせる。目鼻立ち

極めて秀麗。麗しいと言っているほどの美貌の青年がわたしを見つめている……。それにしても際立った容貌に気を取られて何か大事なことが思い出せない。

（この人……なんか見たことある？ でも思い出せない、えっと、誰だっけ？ 誰だっけ？）

「おい、聞いているのか？」

左耳にかけた片眼鏡が太陽を反射してキラリと光る。——片眼鏡なんて、周りですてる人見たことがない。そういえば、服装も……。そんなことより、さつき大事なワードが出なかった？

「えっ？　　というか、わたし公爵家の令嬢なんですか？」

そう、手掛かりとなる大事なワードは『公爵家の令嬢』だ。それをこの美青年はわたしに向けて言ったのだった。

「何を言っている、そうに決まっているだろう」

治らないはずの足が治り、髪色が変わった。この人はわたしのことを公爵家の令嬢と呼ぶ。

（これって、まさか――）

「て、転生！？ ああ最近はやりの！ まさかわたしが？」

あらためて足が気になってその場を走ってみる。それから体を頭から足の先まで触ってみる。

「なにこれ！ 痩せてる！ 手足も長い！ やっぱこれって転生――」

~~~~~!?」

わたしの挙動不審っぷりに虚を突かれたようで黙っていたイケメンの彼がやっとのことで眩いた。

「一人で城を抜け出して、深窓の令嬢が走り回る……、発言も支離滅裂……」

「あつ、あの、これには事情が」

転生して別人になってるなんて大事件だ。ただ伝わるだろうか。

「君は身分をかさに着て傍若無人な態度でわがままばかりだったな」

「えっ、あなた、わたしのことよくご存じなんですか？」

「貴族は好かないし、本当は関わりたくないのだが仕方ない。城まで送

るしかないな」

丘の麓にある西洋風の立派なお城を指さす。

「城ってあそこにあるあれですか？」

「そうだが？」

「だったら、自分で帰ります。ご親切にありがとうございます、では！」

言うなり、わたしは全速力でお城に向けて走り出した。

「令嬢が自分の手足を動かすなど恥だと言っていなかったか!? って、もういない」

異世界での姿のことを知っている人ともう少し交流を持った方が良かったかもしれない。でも、もっと走ってみたい気持ちを抑えきれなかった。走るのにちょうどよさそうな距離に家があると聞いたなら我慢するのは無理だった。

お城の警護をしているらしき兵隊の一人に声を掛ける。

「すみません、わたしここの住人らしいのですが、中に入れますか？」  
兵隊の男性は驚きの声をあげる。

「おっ、お、お嬢様！ 何事ですか？ お一人でいらっしゃるなんて！ まさか事件に巻き込まれたのですか？」

「えっ、いや、事件とかじゃないです。うーん、なんというか外で遊んでただけなんですが」

転生したのは大事件だが、それをここでも言っても通じないだろう。

「お召し物もそんなに汚れて。いつも塵一つ許さないお嬢様が……やはり何かあったのですね……！」

そのままあれよあれよという間に兵隊さんに輿に乗せられ、二人がかりで担がれた。城の奥へ運ばれて行く。

（せっかく歩けるようになったのに、また車椅子的なものに乗ってしまった……）

連れていかれたのは高級ホテルのスイートルームも真っ青な大変豪華



な一室だった。

「お嬢様！　なんてお姿……　すぐに湯を準備いたします」

メイド服の侍女らしき女性が言う。どことなく、こちらを恐れているかのような雰囲気を感じる。先ほどの兵隊さんもそうだった。

「失礼いたします」

当然のようにドレスのボタンに手を掛け、外していく。驚いて慌てて叫ぶ。

「ちよつと、あの、服は自分で脱げます……！」

「お、お嬢様、いかがされたのですか……！」

世界の終わりのような表情をして侍女の彼女が言う。

「え、いや、どうもしないけど、服は脱げるし、足も動くからお風呂も一人で入れます」

「やっぱり、お嬢様がご乱心だわ。いつもなら何一つご自分でなさらないのに。ちょっとそこのあなた、すぐにお医者様をお呼びして！」

「いや、病気じゃないです！　は、離してー！！！」

有無を言わず、脱がされ、体を拭かれ、ベッドに寝かされた。

足が不自由な時は時間がかかっても、自分のことを自分でさせてもらえることが配慮や思いやりだったように思う。体が自由に動くのに何もさせてもらえないのは不思議に感じた。

心配してくれている侍女さんの仕事を邪魔するのも悪いのでふかふかのお布団で大人しくする。せわしく立ち動いていた彼女の仕事が落ちていたようなので声を掛けてみる。気になっていることがある。

「あのう、すみません。聞いてもいいですか？」

「まあ、わたくしなどにそのような丁寧なお言葉をお使いになるなんて！　今まで使用人なんて虫けらのごとく扱っていたのに！」

侍女さんのほうこそご乱心だ。元のご令嬢はヤバい人なのかもしれない。落ち着いてもらうには敬語はやめた方が良さそうだ。

「ご、ごめんね。ところで今日は何年の何月何日かな？」

まだ訝しそうにしていたが教えてくれた。

「……建国暦765年、3月9日でございます」

（建国暦？　これって、もしかして……）

しばし考えに耽っていると、一枚板でできた重厚なドアをノックする音がした。

「失礼、公爵のご令嬢を送り届けなかった非礼を詫びに参りました」  
部屋に入ってきたのはさつき出会ったイケメンだった。

「あっ！　ああああ〜〜〜！」

顔を見た瞬間にわたしは叫んでしまった。

「どこかで見たことがあると思ったら！　あなた、宰相様ね！」

「そうだが。そんなの百も承知だろう。今さら何を言っている？」

（うわー！ やっぱり！ ここはあのゲームの世界！ そしてこの人は宰相様だわ！ 攻略対象外のキャラだったけど、やけにイケメンでCGに気合いが入ってたの覚えてる）

「いやー、さすがイケメン！ あのお洋服も実写化するとこんなに素敵なのね！」

「いけめん？ 君、やっぱり不可解だな。何を言っている？」

「あつ、あはははは。ちよつと食べすぎちゃったみたいで……」

いちご大福を思い出して取り繕う。

（エンディングが分からずじまいだった。だったらリアルで見てみたい。わたしはヒロインと幼馴染の近衛兵の彼を攻略してたのよね、会っ

てみた〜い)

しばしうつとりしていたらはたと気が付いた。

「さ、宰相様！ わたし、実は庶民だったりしませんか？ この髪色も染めてて地毛は栗色だったり？」

「あり得ない。この国でも有数の力を持っている公爵家の令嬢だ。君の銀髪は社交界の花ともてはやされている。それを鼻にかけていただらう」

「やっぱり〜〜〜！ 悪役令嬢だ〜〜〜！！！！！」

ゲームの主人公は庶民で栗色の髪だった。万に一つの可能性にかけて聞いてみたがやっぱり駄目だった。宰相様は深窓の令嬢らしからぬ大声

にドン引きしている。

（よりによってライバルの悪役令嬢なんて……！）

悪役令嬢と言えば、ヒロインの恋路を邪魔しまくるキャラクターだった。

（予算削減のためか、誰を攻略ルートに選んでも、その恋を邪魔しに来るめんどくさいキャラじゃないの）

それどころではない事実に気づく。

（どのルートでも処刑されるという雑な扱いを悪役令嬢は受ける……）

『処刑』という恐ろしい運命に現実を引き戻される。

（近衛兵の彼に会うところではないわ。会ったら処刑されてしまう！

やめる！ 攻略対象に関わるのは！）

「君、挙動不審だぞ……。大丈夫か？」

赤くなったり青くなったりしながら右往左往していたわたしを見かねたようだ。

（ん？ この宰相様は？ ヒントを出すキャラだし、エンディングまで生き残ってた！ 何よりヒロインの攻略対象外！）

ベッドから飛び起きて、宰相様の襟首をつかむ。

「宰相様！ もう少しうちにいてください！ なんなら住んでください！」

この人の近くにいれば生き残れそうだし、いろいろヒントくれそう。



とりあえずこのまま帰られては困る。少しでも引き留めたい。

（こんなイケメンなのに攻略対象じゃなくてびっくりしたのよね。ゲームを進めるためのアシスタントキャラって感じだった）

「な、何を言っているんだ。俺は貴族の子飼いにはならないぞ」

宰相様はわたしの剣幕にさらに引いているようだ。

（ふふふ。攻略対象外なので安心すぎる、この人の側にいよう。何なら結婚してもらいたい）

襟首をつかむ手に一層力が入る。

「ごめんなさい、わたし死にたくないんです！ だから強引にいかせてもらいます。そのあなた達！ 宰相様を応接室にお連れして！」

屈強な使用人に担がれて離れの応接室へ運ばれていく。わたしもその後ろを走って追いかける。

応接室のベッドに宰相様が投げ込まれた。わたしも部屋へ入る。使用人たちは宰相様に対する失礼を恥じるかのように応接室の外へ下がった。

「絶対逃がしちゃダメ！」

ドアを背に宰相様の退路を塞ぐ。その時、ガチャンと大きな音がした。

「開きません！」

外から使用人が叫んだ。

「鍵が壊れました！」

屈強な使用人が力ずくで開けようとするがびくもしない。

とりあえず宰相様を閉じ込めるつもりが、なんと一緒に閉じ込められてしまった！

その時、ピンクの花びらが一枚眼前を落ちていった。

（室内なのにな？）

そう思って床を見たら、その花びらは落ちていなかった。

（……気のせいかな？）

一瞬気を取られたが、それどころではない。

「あの、怒ってますよね？」

恐る恐るベッドに脚を組んで座って顔に肘をついた宰相様に聞いてみる。

「……いや。俺は軍にいたこともある。実戦経験のない使用人から逃られないはずがない。それに君が鍵についてどうこう言っているのをおとなしく待つ必要があるか？」

（頭がいいだけじゃなくて、軍で訓練まで受けていたなんて。文武両道ってかっこいい）

宰相様の魅力に気を取られたけれど、それどころではなかった。

「えっ？　もしかして気が変わってうちに住みたくなっただんですか？」

「違う。体がなぜか避けるほうに動かなくなった」

「えっ？　そんなことあります？　やっぱりうちが気に入ったのを認めたくないとかでは？」

「気が向くとか向かないとかいう問題じゃない！　避けようとしたら手も足も動かなくなったんだ」

「ええー！　体が動かないなんてちよつと信じられないです」

「そんなことは俺が言いたい！　体がなぜか動かないなんて論理的じゃない」

本当に自由がきかなくて苛立っているように見えた。

（でも、わたしとしては好都合だわ。このまま滞在してもらおう！）

しめしめと置いていたら、なぜか足元が揺らいだ気がした。そのまま後ろに一步足を着く。

「えっ！ あっ、きゃっ！」

二歩、三歩と後ずさり、宰相様が座っているベッドに後ろ向きに倒れてしまった。衝撃につむってしまった目を開けるとこちらをのぞき込んでいる美しい顔と目があった。

「あれ？ すみません、つまずいたみたいで……」

慌てて上半身を起こしてベッドに座る形になる。そのまま立ち上がろうとするけど立てない。

（なんで？ 転生したのにまた足が動かなくなった？）

恐ろしい可能性が浮かんでくる。その瞬間に肩の上から手が伸びてきて体が包まれた。体温と少しだけ汗のにおいを感じる。イケメンの汗は臭いどころかいいい香りなのね、などとそれどころではないのに思ってしまう。

「えっ？ えっ？？ どうかしたんですか？」

「まだだ！ また体が勝手に！」

「はいい？ そんな馬鹿な。もう、しっかりしてください！」

そう言って立ち上がろうとすると、今度は立てた。

（良かった、足が動く……）

ただ、肩から回った手はそのままだ。宰相様も立ち上がりわたしを背後から抱きしめている。肩から回されていた手が下にさがり、わたしの腕の下に移動する。

「ちよっ、えっ、あっ」

そのまま手が上ってきて、胸の上に辿り着く。

「なっ、なにするんですか！」

今日初めて会った人に胸を触られるなんて大事件だ。

「まただ！ 勝手に動いて……、止められない！」

驚きに満ちた声を出しているくせに手は胸をしっかりと包み込んで、きゅっ♡っを持ち上げた。



「ちよっ、ホント、やめてっ♡」

転生して大きくなった推定Gカップの胸を持ち上げられて右手は上に左手は下に互い違いになるようにぐにぐに♡って揉まれる。

（胸、大きいとこんなこともできるのね、ってそんな場合じゃない！）  
服の上からぐいぐい♡って揉まれたり、持ち上げられてたぷたぷ♡ゆさゆさ♡って動かされる。

（おっぱい、好き勝手にされてる……♡ 恥ずかしい♡ 宰相様、真面目そうなのにこんな激しく動かすなんて……）

手の動きはとまるどころかどんどんエスカレートしていく。

「やっ♡ あっ♡ んんっ♡」

ついに甘い声を漏らしてしまふ。

「なんで触るんですか！」

このままではいけないとようやく叫んだ。

「君の言うことはもっともだ、今君に触ることには全く合理的な理由がない」

（この人、こんなことしながら、何冷静なこと言ってるの!?)

心の中でツツコみつっ、尋ねた。

「ではなぜ触るんです？」

「知らん」

そんなはずがあるわけがない。そしてやり取りの最中も手は止まらな

い。揉んでいた手は服越しに乳首を弄りはじめた。人差し指での確に乳首のある場所をツンツン♡って強く突いてくる。

「んっ♡　っあん♡　だ、だったらやめてくださっ、いい……♡」

おっぱいへの刺激に声が乱れてしまう。

（あっ♡　今度はぐりぐり♡されてるう♡　乳首の場所ぐりぐり♡されるの、恥ずかしいけど♡　気持ちいい♡）

転生前は彼氏はいたことがなかった。男の人におっぱいをねちねち♡触られるのは初めてだった。宰相様はきっと経験豊富だろう。手つきが慣れ過ぎている。

「やめたいのにできないんだ！」

言った瞬間にきゅっ♡と両乳首を服ごと強く摘ままれる。服の中で乳首がじんじん♡して尖ってくるのを感じる。

「ひいんっ♡ んんっ♡ そ、そんなこと♡ あっ♡ ……あります？」

恥ずかしくて、気持ち良くてもう無理だった。情けない声がでて、息がはあはあ♡って乱れ始める。

「君のほうこそ、この展開がおかしいと思うなら拒否してくれ！」

次は四本の指でおっぱいを掴みながら、人差し指を立てて爪で乳首の先端をコリコリ♡している。コリッ♡って搔かれるとビリッ♡って快感が走る。

「…はあはあっ♡　む、無茶苦茶ですよ！　んんっ♡　触ってる方がやめれば済むでしょ！」

「どうしてもできないんだ！　頼む、君から拒否してくれ！」

いやらしい手つきで乳首を弄くり回している人のセリフではない。おっぱいを弄られすぎて、足の間の奥がきゅん♡って切なくなってきた。

「…：っやあ♡　いつ、意味が分かりません！」

「俺はもう試した！　離れようとしても離れられない！」

必死に乳首に対する責め苦に耐えながら会話を続ける。

「もう！　じゃあ遠慮なく。払いのけますよ！」

「頼む！」

（そう言うなら思い切り、突き飛ばしてやるんだから！）

「うーん！ えいっ！」

掛け声とともに腕を振って、思いっきり払いのけようとした瞬間。  
ふるん♡とドレスがずり下げられておっぱいが飛び出した。

「えっ！ ウソ！ なんで!？」

（今、わたしは腕を払おうとしたはずなのに！）

両手は宰相様を突き飛ばすのではなく、ドレスを思い切り握ったかと思ふとブラごと真下に引き下げていたのだった。おっぱいは支えを失ってたぶん♡たぶん♡って揺れてる。その先端に弄られてピンピン♡に尖った乳首が丸見えだった。

（は、恥ずかしい♡ おっぱいなんて誰にも見られたことないのにつ

♡）

起きた事象にパニックになっていると宰相様が叫ぶ。

「おい！ 拒否しろと言ってるのになぜ脱ぐ！」

我に返って必死で答える。

「違うんです！ 変なんです！ わたし、振り解こうとしたつもりなのに手が勝手に！」

さっきは手が勝手に動いたし、今はおっぱいを隠したいのに。手が別人格のように持ち主の言うことを聞かない。

（わたし、歩けないし前世ではお付き合ひすらしたことないのに）

泣きそうになりながらも成すすべがない。途方に暮れていたら、宰相様の手が動き出した。

丸出しの生のおっぱいに伸びる手が止められない。

（おっぱい♡ 直接触られたら……♡ わたしどうなっちゃうの？）

恥ずかしくて、逃れたいのに今から起きることを想像してしまう。

尖った乳首を宰相様の長い指先がちょん♡と触った。

「ひあっ♡ ひいいんっ♡」

少し触っただけなのに快感が胸の先端から足の奥へ走り抜けた。わたし処女なのにエッチなのか、悪役令嬢の体を感じやすいのか分からない。  
い。



（やだっ♡ 宰相様は冷静なのに♡ おっぱい出して♡ 気持ちよくって声出しちゃって、恥ずかしいっ……♡）

「んっ♡ ……あっ♡ はあっ♡ さあい、しよおさまあ……♡ わたしたち、どうなっちゃうの……？」

息も絶え絶えに尋ねたら、宰相様は想像を超えた解答をしてきたのだった。

「決まってるだろ、今すぐここから出……らずに、いやらしく濡れてぐちゅぐちゅ♡の君の処女まんこに俺のでっかいちんぽをぶち込んでやる。奥まで突きまくって中にたっぷり出してやるよ」

突然のド級の淫語のオンパレードに度肝を抜かれる。

「い、いきなり何言ってるんですか！」

「こ、今度は口が勝手に……」

「そんな……、とにかく一旦わたしから離れ……ないで、クリをコリコリ♡っていじめてほしい♡ それから、指でおまんこの中をぐちゅぐちゅ♡って掻き混ぜてイかせて……♡ 何度もイってヌルヌル♡になったおまんこに勃起おちんぽをどちゅん♡って入れて♡ 激しい腰振りで子宮口までめちやくちやに突いてえ♡」

（えっ、口が勝手にってこういうこと？ で、でも全くのウソとかじゃない。本音ではされたいことを言ってしまった……♡）

こんな卑猥なことを口に出したのは前世から今まで初めてで。心も体

も理性の言うことをきかなくなっていた。本能のままに口も体も動いてしまう。

（どうやら、逃れられない……。どうせ逃れられないなら……。♡）

そんな考えが二人に浮かんだんだと思う。わたしはおっぱいを執拗に弄られておまんこが濡れて滴るほどに感じていた。触ってる側の宰相様もその気になっているに違いなかった。

（だって……お尻に硬くて大きいのが当たってる……。♡）

お尻の割れ目にゴリゴリ♡って大きい勃起おちんぼが宰相様の欲情を知らせてくる。

「もう、逃げられなさそうですね……」

「そつ、そうだな。仕方ないんだこれは……」

二人が共犯になった瞬間だった。なぜかわからない力で無理やり卑猥なことをさせられているテイに乗っかることに決めた。

宰相様の手で背後から胸を触られていた形から向かい合わせに体勢を変えられた。

ドレスから溢れるおっぱいが強調されてしまっている。

宰相様はおっぱいを熱っぱい目で見つめたかと思うと少し乱暴に両手で掴んだ。

むちっ♡っと弾力があってみずみずしい柔肉がしっとり♡と手のひらに吸い付くようだった。

「あっ♡ ひうっ♡」

声を漏らして半開きになった唇に貪りつくように宰相様の形のいい唇が吸い付いてきた。

「あっ♡ わたしっ、キス初めてで……♡」

「俺が全部教えてやる……」

ぢゅっ♡ ぢゅるっ♡

胸をぐにぐに♡って揉まれながら、音を立ててキスをされる。柔らかい唇がむにむに♡って押し付けられるのがたまらない。

(だめ……♡ 初めてのキスがこんな激しいなんて♡ 気持ち良くて♡ 頭ふわふわする……♡)

初めてながら、無我夢中でキスに応える。息苦しくて開いた隙間から、生き物みたいなぬるぬる♡の長い舌が口内を犯しに来た。

れろっ……♡ れろれろ♡ くちゅっ♡ れろっ……♡ ぢゅっ♡ れろれろれろれろっ……♡

粘膜を長い舌で舐めまわされて、唾液を吸われる。同時に胸の先端の薄ピンクの尖りをくにくに♡こりこり♡ねちねち♡しつこく刺激される。

（どうしよう……♡ キスと乳首同時にされるの、気持ちいいよ♡）  
ベッドに乱暴に座らされた。ドレスをめくりあげられると足と下腹部が露わになった。

「は、恥ずかしいです♡ パンツ見ないで……♡」  
今さらとは言え、恥ずかしいものは恥ずかしい。

「ここ、いやらしい汁がしみ込んでいるが？」  
人差し指でパンツの中央を軽く突かれる。

「ひいん♡ ううっ♡ やっ♡」

両足をたくましい腕で大きく開かれてしまう。

（だめ♡ こんな格好♡）

グッと宰相様の頭が寄る。パンツにぐりぐり♡って鼻をこすりつけられてしまう。

「いやらしい雌の匂いにする……」

「いやあ♡ 嗅がないでっ♡」

いやいやって首を振って逃れようとするけれど、膝をがちりつかんで思い切り脚を開かされていて逃げられない。



ぢゅっ♡ ぢゅる♡ ぢゅっ♡

音を立ててパンツを口に含まれて強く吸われてしまった。愛液と唾液で薄い布地がびっちより♡濡れてしまい、ぴっとり♡と陰唇に張り付いた。

「すごい、透けてる。君のクリとビラ肉の形が丸わかりだ。クリは処女なのにもうぷっくり勃起して大きい。おまんこは綺麗な形だ♡」

（やだっ、自分で見たこともないところ、じっくり見られて詳しく言われるの恥ずかしすぎる……♡）

卑猥な辱めにおまんこからまたとぷっ♡って愛液が溢れてしまう。

「あつ、おまんこから蜜がとろり♡ってでてきた。嫌がるフリして感じてるのいやらしいな」

いちいち実況されて羞恥心で顔が熱くなる。

「蜜でとろとろのおまんこをちゃんと見てあげるよ」

クロッチを人差し指で引っ掛けてぐいっ♡って外に引っ張られる。

ぷりぷり♡のマン肉は愛液で濡れててら♡といやらしく光っている。

「やめて……♡」

「やめられないのわかってるだろ。煽ってるの？　こんなおまんこところ♡のくせに」

中指でおまんこを円を描くように、愛液を滑らすようにくるくる♡  
て撫でられた。

「ひいん♡♡♡ ひあ♡♡♡ んぐ♡♡♡ ひう♡♡♡」

「だめっ、外だけなんて♡ 指入れて♡♡ ナカ触ってえ♡」

「おねだり、上手だな」

ずぽ♡♡♡ ぬちゅ♡♡♡ ずちゅ♡♡♡

節くれだった太くてゴツゴツした中指を一気に奥まで差し込まれる。

「あっ♡ ああ♡ んんっ♡」

(……指っ♡ 気持ちいいよお♡ 太くて硬くて♡ 激しく出し入れされる……♡ ナカが擦れて♡ もうダメ……♡)

気持ちよくって腰をへこへこ♡って下手くそな腰振りをしてしまう。抜き差しから、中をトントン♡って叩く動きに変化する。Gスポットをいとも簡単に探り当てられてしまった。

トントンっ♡ コスコス♡ ぐちゅぐちゅっ♡ トントン♡

「あっ♡ ああん♡ ひう♡ そこっ、らめえ……♡ さいしょ、さま

♡

「クラウドだ。そう呼べ。それからイクときはイキますって言うんだ。勝手にイクな」

言い終わるや否や指の速度が速まった。

「ううつ♡ あっ♡ ク、クラウド様あ……♡ ぎ、気持ちいい♡  
いいのお♡ あっ♡ ああっ♡ イクっ♡ イキますう……！♡」

びくびくっ♡って体を震わせてわたしはイってしまった。膣壁がきゅきゅ♡って収縮して、クラウド様の指を締め上げる。

「くっ、もう待てない」

クラウド様が服を脱いだ。露わになった上半身には一切の無駄な肉が

ない。細身に見えて彫刻のような美しい筋肉がついている。ベルトに手を掛け、下半身も脱いだ。

知的で落ち着いた佇まいからは想像できないくらいの凶悪なモノだった。

「こ、こんな大きい……入らない……♡」

思わず言ってしまうくらいの質量だった。反り返って、ビキビキって血管が生き物みたいに纏わりついている。

たくさん濡らしてもらったけれど、こんなに入れたら裂けてしまいそう  
うだ。

そう思ったけれど膣は心とは別人のようにおちんぽを欲してしまっ

いる。

巨根を見た瞬間に膣肉がきゅんきゅん♡って収縮して、愛液をこぼこぼ♡って溢れさせてしまった。

パンツを脱ぐと自分からさつきみたいに脚をM字に大きく開く。

自ら人差し指と中指で陰唇をくぱあ♡って広げると愛液がどろり♡って零れる。

「クラウス様あ♡ そのおつきいおちんぼくください♡ おまんこぐちゃぐちゃにして、ナカに出して欲しいの♡」

「淫乱だな……♡ 後悔するなよ」

腰をがちりと掴まれる。先走りの雫があふれている。

腫れた亀頭を割れ目にぐりぐり♡擦られる。

「はあ♡ やっ♡ ぐりぐりしないでえ♡ ヌルヌルでっ♡ 熱いっ

♡」

涙をこぼしながらいやいやって顔を振るけれど、たくましい腕はビク  
ともしない。

「入れるぞ」

どちゅっ♡ ぐぐっ♡ ずちゅっ♡ ずずっ♡ にゆるるっ♡

「ひぐうっ♡ があっ♡ おほっ♡」



ぐずぐず♡にとろけたおまんこは極太の剛直をちゅうちゅう♡吸うように亀頭を飲み込んだ。指しか入れたことのない処女の狭い膣道を圧倒的な質量がみちみち♡って無理やり侵入してくる。

「くっ♡　せつま……♡　さすが処女まんこは締まりがいい……♡」  
どちゅっ♡って根元まで粘液でヌルヌル♡男根を埋め込まれた。

「おほっ♡　あぁっ♡　熱いっ♡　ナカ擦れて♡」

膣のヒダに雄芯が触れるとたまらなく気持ち良かった。

クラウド様がゆっくりとえぐるように中を搔くと快感が痺れるように襲ってくる。

（初めてなのに♡　おちんちんでずぼずぼ♡って突かれるの気持ちいい

よお♡ さっきの変な力で処女なのに痛くない。もしかして、感度も上がってるの？)

腰をへこへこ♡振って次第に強くなっていく快感を逃がそうとする。

「ホントにドスケベだな……♡ 処女なのに感じすぎじゃないか？ 遠慮はいらないようだな」

クラウド様が嬉しそうに口角を上げた。覆いかぶさっていた上体を少し起こす。浅く抜き差しを続けながら、人差し指と中指を割れ目を挟むように置かれる。指をそのままお腹側に少し押し上げる。

置かれた指の間の上の方、突起を指の腹で押されてしまう。触られた瞬間にビクンと体が跳ねた。

「ひい♡ おほっ♡ ああっ♡ ぐうあ♡ やめてえ♡」

（だめだめだめ♡ 中はおちんちんでどちゅどちゅ♡突かれて、クリマで触られたら♡ 気持ちよすぎておかしくなっちゃうよおお♡）

「皮を剥かれてぷっくり腫れたクリトリス晒して……♡ 感じてるくせに。イカせてやるよ」

愛液をたっぷり指に絡ませて、クリトリスを指でくるくる♡トントン♡って刺激されるとおかしくなりそうだった。触るたびにビクビク♡って体を跳ねさせてしまう。正気を保とうと必死で腰をへこへこ♡って揺らす。

（あっ♡ これだめ……。おまんことおちんちんが擦れて余計気持ちよ

くなっちゃう♡)

快感の強烈な波が襲ってきて、吞まれそうになって慌てて叫ぶ。

「あっ♡ イ……イキそう♡ イキそうです♡ あん♡ いっちゃう♡ いぎますう♡ イクイクイクグ……♡ あっ♡ おっ♡ おおっ♡ おぼっ♡」

濁った声を出してイってしまった。

「おちんぽ、おまんこで啜えたままクリでイったな？ ビクビク♡してる。次はナカでイかせてやる」

そう言うのと、さっきのゆっくりな動きから速くて激しい抽送が始まった。

「あっ♡ クラウス様♡ 無理っ♡ イったばかりなの♡」

どちゅどちゅ♡ ずこずこ♡ パンパン♡

謎の力のせいか、もしくは本性か。クラウス様のエッチは激しすぎる。

力強く体を打ち付けるぱんぱん♡っていう破裂音が部屋に響く。

「やっ♡ やんっ♡ ひいん♡ おほっ♡」

ぬちゃぬちゃ♡って音を立てて剛棒と膣肉が体液でぐずぐずにとろけ合っているようだ。

「だすぞ……♡」

「いっぱい……♡　くらさいい♡　おまんこの中、クラウド様の♡  
せええきで♡　おなかぱんぱんにしてえ♡」

潤んだ目で必死にねだった。この美しい男の精を一滴残らず受け入れたかった。

どちゅ♡　ずず♡　ぱんぱん♡　どちゅん♡

奥を突かれると目の奥にバチバチ♡って快感が走る。

「あ♡　……や♡　んん♡」

手はシーツを力いっぱい握りしめる。足の指をきゅっと握りこむように丸めて強すぎる快感に耐えようとする。

どっちゅんっ♡

くくくっ♡ びゅるっ♡ びゅるるるくくくっ♡ びゅびゅっ♡  
びゅるるるっ♡

「やあぁあぁあぁっ♡ あぁあぁっ♡ んっ♡ ……熱いっ♡ あぁあぁっ♡ おほっ♡」

男根が脈打ちながら熱い熱い精液を膣内に放出する。膣壁がにゆるにゆる♡って律動して精液を奥へ奥へと吸い上げていく。処女にあるまじき事態だが、射精と同時にわたしはイってしまった。

初体験と思えない濃厚な夜を過ごして、疲れ切ったわたしは裸のまま応接室のベッドでそのまま眠りに落ちた。

窓からの朝の光で目を覚ますと、ブラウス様はもう服を着ていて何やら神秘的な顔をしている。その横顔が、初対面の時より素敵に見えてしまう。初めてを捧げた相手だからだろうか。わたしも慌てて服を身に付け



る。

「……侍女は呼ばないのか？」

「事後の姿を見られるのは恥ずかしいので。それに自分でできることは自分でやりたいんです」

「意外に君は貴族らしくない。だが俺はそっちの方がいいと思う」  
そして、意を決したかのように言った。

「昨日の件については、俺が全責任を負う」

（よかった！ 結婚ね！ これで処刑回避！）

安心したのもつかの間、クラウド様の提案は予想の斜め上だった。

「十分な金額の補償を用意する」

「はい？」

意味が分かな過ぎる。

「君の家格に見合う縁談も探す」

「いやいやいやいやいやいや！　あなたと一夜の過ちを犯したのに  
どうして他の人が出てくるんです？」

『いや』をこれほど連発したことはない。

「君は公爵令嬢だ。俺は貴族とは言え妾腹だ。本来なら、君はもっと良い縁談を選べた。その機会を俺が奪うわけにはいかない。いつも家柄こそ全てと言っていただろう」

「……昔のわたしはそうだったのかもしれませんが。今は違います」

さすが『悪役』令嬢だ。わたしが入る前は身分で差別しまくっていたのだろう。

「何……？」

クラス様はいぶかしげな顔をしている。

（変な方向だけど責任感は強いんだなあ）

現代だったら一度関係を持ったくらいで責任がどうのとは言わないだろう。軽く息を吐いて切り出す。

「わたしは立派な家柄の男性と結婚したいものではありません」

生きるか死ぬかの時に身分がどうのとは言っていられないのだ。

「あなたに味方になってほしいんです。わたしの未来を変えられるの

は、クラウド様だけなんです」

驚きを隠せないというように緑色の目を見開く。

「未来……だと？」

「わたしは未来を知っています。だから、お願いします。信じてください」

「……昨夜、君が言っていた『死にたくない』という言葉と関係があるのか」

「はい」

（意外……覚えていたのね）

「未来を知る力など、俺には信じられない」

クラウス様がわたしを真っ直ぐに見据える。

「だが、君がそこまで言うのなら——証明してみろ」

にわかには信じがたい話だ。証明さえすれば信じてくれるというクラウス様は本当に理論主義者だと思う。

「わかりました。明日の春の舞踏会で証明してみせます」

## 第二章 未来を変える悪役令嬢

今日は、こっちの世界の3月9日。そう、明日が春の舞踏会だ。庶民で健気なヒロインが攻略対象達と出会うイベントが起きる。

重要行事の春の舞踏会には宰相であるクラウド様も出席する。それに乗っかってわたしもついてきた。

「はっ、あれは攻略対象の王子様！」

自分としては機敏な動きで、立派な彫刻の施された柱に隠れる。

「何をしているんだ」

クラウド様は呆れ気味だ。

「処刑されたくないんです！」

謎の力が働く状況で攻略対象と無駄に関わるとロクなことがないだろう。

大広間の最奥の王子様の席は無人だ。空の椅子の右横に護衛する騎士団長様、左には賢者様が控えている。

今だ！　と思ったら広間に白い花びらが降った。

（開会のタイミングで屋内なのに花を降らすなんて、さすが王宮の舞踏会！）

感激してクラウド様に「綺麗ですね」って言ったけれど、集中しているのか返答はなかった。気を取り直して予言だ。的中させてクラウド様

に信じてもらわないといけない。

「まずはここで、舞台の真ん中で盛大に転ぶ女性が現れます」

クラウド様に耳打ちするけれど、全く信じていない顔だ。

直後に慣れないドレスで王子様の正面で女性がすっ転んだ。

（これが、正ヒロイン！　かわいい）。王宮なんて緊張するよね、がんばれ〜！）

思わず応援してしまう。クラウド様は何も言わなかったが片眉を上げた。

「次に彼女の手を取って助けるのが騎士団長様です」



鮮やかな赤毛の長身の騎士団長様が転んだヒロインを助け起こす。

「まさか……」

間髪入れず次に起こる出来事を予言する。

「ここで、遅刻してきた王子様が近衛兵を伴って入ってきます」

「そんなことが……偶然では」

さすがに三度目だ。疑り深いクラウド様のためにもう一つ！

「それでは極めつけに賢者様が『面白い娘ですね』と言います」

少し離れているが口の動きからそう言ったのは間違いないかった。

「さすがに、これらが起きる確率はかなり低い。偶然では説明がつかないな……」

神妙なクラウド様にわたしは少しだけ得意気になる。

「でしょう。わたしの家に滞在してくれますね？」

「仕方ないな。予知能力が本当なら、国防に活かせるかもしれない。君を見張って能力を見極めねばならない」



俺が彼女のことを知ったのは、宰相の職に就いたときだった。この城へ入ると使用人に高飛車に命令している姿を見かけた。

「ちよっと、この花は今日のドレスに合わない。青色の花にして。さっさと家中の花瓶を取り換えるのよ」

（自分では何もできないくせに本当に偉そうだ。これだから貴族は）

嫌な気持ちになったが、慣れているので何食わぬ顔で挨拶をした。

俺に対しては丁重な態度だった。地位と家柄のみで判断しているわけだ。俺の出自を知ったら、使用人にしたみたいな態度に変わるのだろう。

最初に会った時の印象があったから再会したときは驚いた。屈託のない顔で笑い、自分の足で楽しそうに走る。何が彼女を変えたのか。それとも最初に見たのが間違いだったのか……。興味が湧いて城に来た。

（そう、興味だ。俺の知的好奇心を刺激したのさ。単にそれだけだ。貴族の令嬢になどそれ以外の関心はない）

そう思っていたのに、城に滞在し、遂には変な力に閉じ込められて関係まで持ってしまった。

家柄ではなく、俺個人に力になって欲しいと言った。そんな風に言われたのは初めてだった。

（認めたくはないが彼女が気になってしまう）



クラウド様が公爵家のお城で暮らし始めてから数日後。

悪役令嬢であるわたしとヒロインは貴族の子女が集う格式高い学園に

通っている。学園の敷地には裏庭として広大な森があった。今日はここで狩猟実習を行うのだ。狩猟は社交の場にもなるらしい。この国では男女と問わず貴族の嗜みとされる。

（現代のゴルフみたいなものね）

学園の狩猟実習には万一の時のために軍隊から数人警備が派遣されるのが慣例だ。

今回は異例なほど豪華だった。先日の春の舞踏会にいた騎士団長とクラウス様が来ている。わたしが来るようお願いしたからだ。